

中に、出来るだけ英語を交えない。日本語で言える語彙は日本語で話すこと。

子ども全員が、小学校から中学校途中まで補習校へ通いました。持って帰ってくる家庭学習の宿題を、かならず一緒に座って、見てあげます。科目ごとのドリルは、まずは自分でやらせます。我が家では、分からないところがあれば、どんどん答えを見てよし。それでもまだ理解できないことは、私が解説をつけて、分かるまで説明します。

私のやり方は、無謀でしょうか？アメリカで日本語を勉強する子どもにとって、知らない言葉やことがだらけで、当たり前。1週間に1日しかない補習校へ通わせるだけで、日本で学ぶ子ども達に負けないくらいの日本語力がつくとは、とても思えません。日本語の勉強をどう続けられるかが大事なのであって、答えを知らないことは、たいして問題ではないと考えました。それに、例外もあるでしょうが、「宿題（勉強）するのがいや」というのは、子どもの常。まして、土曜日一日がつぶれる上に、アメリカ人の子どもに比べ、一つ多く勉強をしています。勉強嫌いを作らないよう、あまり時間をかけないこと。その代わり、週末を除く毎日、日本語での家庭学習の繰り返し。私自身が最大限に譲歩できることは何か、自分自身との交渉の結果です。後に、この勉強法が、現地校の家庭学習も自分でする効果を生みました。

実を言うと、家の中で、母親が子どもの敵になってしまう一番の原因が、この家庭学習にあるのだと、早くから気が付きました。もし私が、まったく英語が出来ないのに、英語のクラスに1日中入れられたら、はたして耐えられるかどうか。（多分、3日持ちません!）

<長女>

月日が経つのは早いものです。赤ちゃんで連れてきた長女も、この3月で30才を越えました。第一子ですから、親にとってもすべてが初めての経験です。「日本語ができて日本人」という親の教えと育て方を、長女ゆえにまともに受け取りました。自分自身で「私は移民だ」と言い切るほどに、アメリカ生まれの妹達との意識の差として表れています。

彼女は、現在、第二次世界大戦の戦争犯罪を主な研究テーマに、大学で仕事をしています。昨日、また渡欧すると電話して来ました。ルワンダのある政治犯が、オランダのハーグで行われる裁判で証言するというので、法廷で傍聴するためです。ルワンダ・・・？証言には、英語の通訳が付くのでしょう。それまでも、「東京裁判」で行われた、B級戦犯に関する研究をしています。以前、「辞書を引いても分からなかったん



長女の大学卒業式にて

だけだ。お父さん、捕虜と俘虜（ふりよ）はどう違うの？」と、夫に聞いてきたことがあります。言葉の意味というより、どのような状況で捕虜と差別化したのか、それを知りたいと。夫は、その問いに答えてやるのが出来ませんでした。その後、資料を調べた結果を話してくれましたが、おそらくほとんどの日本人が知らないだろう、と思うような解説でした。長女の日本語力は、私達がイメージした以上のものになったようです。

<日本語と英語、どちらが+1?>

アメリカで子育てをし終わってしまった、我が家の子ども達の第一言語は日・英のどちらなのか。子ども達に聞いても「分からない」と、おおよそアメリカ育ちとは思えない、不明瞭な答えが返ってきます。ただ、全員口を揃えて言うのは、「日本語でしゃべっているときは日本語で考え、英語のときは英語よ。」

松本 康子（まつもと やすこ）

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。

子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人に育ちました。しかし、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私が、実は、子どもに育てられていたのです。このコラムでは、「海外でともに育った母と子」の姿を紹介させていただきます。

皆さんの海外での子育ての参考になりますでしょうか？



康子さんの長女、アメリカでの日本語と英語の習得と、お母さんとしての工夫を振り返ったエッセイです。

幼児でアメリカに連れてきたお子さんの言葉の習得を、普通のお母さんが手伝いできるのは、家庭内だけです。康子さんは言語習得の専門家ではありません。しかし、普通のお母さんとして、日常会話や補習校の宿題の中で少しご自分なりの工夫をされました。

それが、補習校や現地校での言語学習「J」に対して、その工夫が専門家の言う「プラス1」の効果を発揮した、とも解釈できますね。